

Title	モンゴル帝国における必闇赤=bitikci : 憲宗メングの時代までを中心として
Sub Title	Bitikci in the Mongol Empire
Author	坂本, 勉(Sakamoto, Tsutomu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.4 (1970. 3) ,p.81(447)- 111(477)
JaLC DOI	
Abstract	This paper is intended to evaluate the role of the "Bitikci" in the Mongol Empire. The word "Bitikci" itself was borrowed from the Uighur language, and its original meaning was "secretary". The Mongolians, who were illiterate warriors, found it very difficult to administer its vast territories and the conquered peoples. They used the well-educated people of the various peoples such as Mongolian, Persian, Uighur, Khitayan, Tangut, etc. These officials were called "Bitikci". It should be remembered that these officials were generally subordinated to their lord of ulus serving at their court (ordu) as a member of Household Department, or, representing their lord in the Central goverment of Qara-Qorum or in the subordinate states such as China, Turkestan, Iran. Again, let it be understood that their duties within and without the court were :- (1) Administration Responsible for general administrative matters; writing Yarligh or decree ; Conferring the newly appointments; Affixing Tamgha or seal Issuing Paiza or special order which attested the authenticity of the Yarligh. (2) Finance To fulfil the role of Treasurer or Tax-collector; To issue Barat or draft; To be concerned with the affairs of merchants and traders. (3) Diplomatic services (4) Special justices Responsible for the investigation of ambassadors who were not acquainted with the Mongolian customs and committed a crime. This official of "Bitikci" was regarded purely as an official. He was, however, no more or no less than "Patrimonialbiirokrat" or the Household official, and the status of "Bitikci" was not stable since the Royal Favorites were appointed to this office.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700300-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

モンゴル帝国における

必闡赤——bitikči

——憲宗メングの時代までを中心として——

坂 本 勉

はじめに

モンゴル帝国において「書記」を意味した官称号 *bitikči* (*bitigči*) についての従来の研究は、その殆んどが言語学的な研究によって占められていたと言ってよく、それによって今まで明らかにされたところは、おおよそ、*bitikči* は、既に、オルホン碑文にも見える *biti* (書く) > *bitik* (文書、手紙) の派生語で、⁽¹⁾ *biti* は、中国語の「筆」(*pit*)、若しくは、インド・ヨーロッパ語系のホータン語 *pidaka* (文書)、サンスクリット語 *pitaka* (経典書) と語源的に関係づけられること、そして、*bitikči* は、カラハン朝時代のクダトク・ビリク (*Kudatku-Bilik*) に初めて見え、⁽³⁾ 十二—十四世紀の古代ウイグル語法律文書

モンゴル帝国における必闡赤——*bitikči*

にも現れて、⁽⁴⁾ 元来は、古代テュルク・ウイグル語の語彙であったのが、十三世紀、ウイグル人の「文化教師」を通じて、モンゴル語に借用され、⁽⁵⁾ その結果、当時の漢文史料に「必闡赤」などと音訳されたが、これのモンゴル語原形は、*bičigēči* と推定されること、⁽⁶⁾ また、この語彙は、現代のモンゴル語諸方言、オスマン、チャガタイの両テュルク文語、コマン語には保存されているが、現代テュルク語諸方言では、消失しかかっている、⁽⁷⁾ というのがそれであった。ところで、このような研究動向に対して、近年、二つの歴史的な研究が現れ、*bitikči* 研究は、一步、進められることになった。真杉慶夫、宮崎市定の両氏によって、それぞれ独立になされた論考は、しかし、*bitikči* そのものの究明を目的としたというよりも、真杉氏は、怯薛(ケシク)制との、宮崎氏は、官職をめぐる蒙漢の確執との関連の中で *bitikči* を捉えようとし、対象とする時代も、主に、元朝に限定し、史料も、元史、元典章という漢文史料だけによって論じておられる。⁽⁸⁾ とりわけ、真杉氏は、世祖クビライの時代まで、目立った動きを見せなかったと

して、チンギス汗より憲宗メングの時代までの、モンゴル帝国初期の時代、いはゆる漠北時代の bitikči について、十分な考察を加えられなかった。私は、このような事情を反省しつつ、先ず、対象とする時代を bitikči が、最もモンゴルのであり得たと思われるモンゴル帝国初期の時代に焦点を据え、真杉、宮崎の両氏は利用されなかったが、しかし、かなりの程度、bitikči のことを伝える二人のイラン史家の著作、ジュワイニー (Juvaini) の「世界征服者の歴史」(The history of the world conqueror)、ラシード・アッ・ディーン (Rashid-ad-din) の「集史」(Сборник летописей)、それに、bitikči の活動を断片的ではあるが、生き生きと描いた、モンゴル時代の旅行家、カルピニ (Carpini)、ルブルック (Rubruck)、趙珙、彭大雅、徐霆たちの記録を通じて、bitikči を、特に、その活動、役割が何であったのか、「官僚」として、どのようなであったのか、ということを中心に、論を進めていきたいと思う。

1. bitikči の登場とその所属

bitikči なる官称号で以って呼ばれる、一定の役割、身分、資格を備えた人たちが、モンゴル高原に登場するのは、チンギス汗帝国が成立した十三世紀初頭のことである。それまで、モンゴル諸部族の大半は、彭大雅が、「其言語有^レ音、而無^レ字」と記録したように、文語を知らぬ、水草を逐う文盲無知の口語的生活を送っていたが、英雄テムジン⁹⁾チンギス汗の出現によって、遊牧帝国が成立するや否や、統治上の必要から、文字の知識および、正書法の技術が渴望せられ、この時、文盲の彼らに代って、先ず、「モンゴル語」をウイグル文字で書写する、ケレイト (Kereit) 部族出身の二人の bitikči — 昔刺幹忽勒 (シラオグル) とアビシカ¹⁰⁾ — が、怯薛(ケシク)の創設された一二〇四年頃、出現し、次いで、モンゴルの西夏、金朝、西ウイグル国、カラ・ヒタイへの遠征、征服、支配が進捗するにつれて、征服地を統治する手段として、それら地域の言語を、その民族の文字で書くことを役割とした bitikči も

また、続々と登場してき、チンギス汗の治世の末年までには、唐兀(Tangut)の僧吉陀(ソギダ)⁽¹¹⁾、女真(Jučen)の粘合重山⁽¹²⁾、契丹(Khitai)の移刺捏児(イラネル)⁽¹³⁾、「高昌人」野里朮(ヤリチュ)⁽¹⁴⁾、「西域谷則幹児朮」(Bala-sagun)出身の曷思麦里(グズバリ Isma'il)など⁽¹⁵⁾、あらゆる民族出身の bitikči が、略々、出揃い、さらに、太宗オゴタイ、定宗グユクの時代になると、民族の多彩さ、人数の点において、チンギス汗の時を、いよいよ凌ぎ、憲宗メングの時には、ラシードが次のように伝える様相を呈したのであった。

「ペルシャ語、ウイグル語、中国語、チベット語、タングート語を知っている、あらゆる民族出身の書記たちが、ある地方に勅令が書かれる場合、それを、その民族の言語と文字とで書くよう仕えていた。」⁽¹⁶⁾

モンゴル諸部族、もっと正確に言えば、モンゴル帝国支配階級の現実的な要求に応えて、登場した、これら bitikči たちは、それでは、どこに所属し、誰と主従の関係を結んでいたのだろうか。

モンゴル帝国における必闡赤=bitikči

元史卷九十九、志四十七、兵二、宿衛の条には、

(i) 「其它預怯薛之職、而居禁近者、分冠服、弓矢、食飲、文史、車馬、廬帳、府庫、医薬、卜祝事」

(ii) 「主文史者、曰必闡赤」

とあるところを見ると、bitikči は、モンゴル大汗、ウルスの汗、諸皇子、諸王を含めた「汗」たちの「恩寵」(Kesig)を受け、主人のオルドに属して、親衛隊員として、軍事的奉仕をし、それとともに、オルドを警護する義務を負い、その他、オルドの一切の諸事務、雑役を行う「汗」たちの「家政機関」=Kesig=怯薛の官の一つであったことが容認できる。箭内互博士は、この Kesig=怯薛(ケシク)をもつ資格のある者は、チンギス汗から憲宗メングの時までの所謂、漠北時代にあつて、ひとりモンゴル大汗だけであつたとされたが、⁽¹⁷⁾だとすれば Kesig=怯薛の官の一つたる bitikči も、モンゴル大汗のところにだけ所属し、彼の恩寵(Kesig)を与えられて、主従の關係にあつたことになるが、果して、そうであつたのだろうか。今、元史、ジュワイニー、ラシードを繙けば、bitikči は、

ジュチ、チャガタイ、トゥルイ、オッチギンといった、ウルス^{II}采領を封与されたチンギス汗の四子、四弟のオールドにも存在したことが確認できるのである。オッチギンのところで bitikči 職にあって、今、名前が知られるのは、一人は、「姓烏古倫、後入^{III}中州、改^{III}姓劉氏^{II}」(元史卷一六二、劉国傑伝)という女真人、劉德寧で、あと一人は、元史卷一三四、撒吉思伝に次のように書かれているウィグル人撒吉思(サルギス)である。

「回鶻人、其国阿大都督多和思之次子也、初為^{III}太祖弟幹真、必闌赤^{II}領^{III}王傳^{II}」

ところで、且つて、村上正二氏は、「王傳」を政治顧問と規定し、モンゴル大汗から派遣された内政監督官とされたけれども、⁽¹⁸⁾とすると、「領^{III}王傳^{II}」という地位にあった bitikči の撒吉思は、「幹真必闌赤」と明記されているにもかかわらず、やはり、モンゴル大汗から派遣された、彼の直属の官と理解されるのであろうか。しかしながら、ジュチ・ウルスの bitikči であったコルグズ(Körgüz)とジュチとの主従関係成立の事情を思いおこせば、これが誤解で

あることは、容易に、納得されるであろう。ジュワイニーは、コルグズのことを、大凡、次のように伝えている。

彼の生誕地は、ビシバリク(Besh-Baligh)を距ること四パラサングのバルリク(Barligh)と呼ばれる小村であった。その村は、ウィグル国の西にあって、その地域を通過する旅行者の道筋にあたっていた。コルグズは、幼くして父を喪ったが、ウィグル文字正書法(Uighur script)の学習に励み、間もなく、それに巧みとなった。大望を抱く彼は、ジュチのオールドに向ったが、すぐには、ジュチ直接の臣下になれず、ジュチの重臣の一人に仕えて、その牧夫となった。ある時、卷狩が催され、主人に従ってジュチに扈從した時、チンギス汗のオールドから、ヤルリク(Yarligh)が送られてきた。その場に、生憎く、それを読むことのできる bitikči が居合せていなかったのので、ウィグル文字正書法(Uighur script)に通曉する者が求められた。そこで、コルグズは、進み出て、『あぶみもち』と思われる作法で読通し、その後、ジュチの書記の一人に列せられた、と云う。⁽¹⁹⁾

このジュワイニーの記事に依れば、コルグズは、チンギス汗のオルドに行った経験、全然なく、先ず、ジュチの重臣と主従の関係を結んで、牧夫となり、その後、ジュチに、ウィグル文字正書法の能力を認められて、彼の家臣となり、*bitikçi* に命ぜられたのである。要するに、*bitikçi* は、モンゴル帝国の大汗とウルスの「汗」たちのオルドに所属し、彼らと主従の関係を結ぶところの「家政機関」員が原則であったのである。それ故、*bitikçi* は「汗」たちのオルド・家政機関に、彼ら本来の活躍の場を与えられ、主人である「汗」たちのために忠実に働くことを通常のこととしていたが、時として、*bitikçi* のある者たちはアルタン・ウルフの共有であり、等しく共同統治権を有すると考えられていた、モンゴル本地の外にある農耕文化地帯—漢地、トルキスタン、イラン—の属領統治機関に、あくまでも「家政機関」員、ウルスの「汗」たちの権益を代表する家臣の資格を保持しつつ、出向の形式をとって派遣され、その統治機構に参加することもあったのである。

「阿母河等処行尚書省」と漢称されたイラン統治機関は

モンゴル帝国における必闡赤=*bitikçi*

オゴタイによって、イラン西征軍の司令長官を命ぜられたチョルマゲン (*Chormaghun*) を援助し、且つ、軍の兵站の補給をはじめの目的として、一二三二年、チン・テムル (*Chin-Temür*) が初代総督に任命されて設置され、チョルマゲンの西征が進捗するにつれて、イランの統治と徴税の事にあたり、フラグの遠征、それに続くイル汗国の成立に至るまで、約二十五年の間、イランに於るモンゴル統治機関として存続した⁽²⁰⁾。さて、征服事業と征服された土地の統治には、チンギス汗一族が共同して当るとの観念から、ここに、一族は、エミール (*emir*) と *bitikçi* をそれぞれ派遣した。故に、初代総督、チン・テムルの下に、彼のネーケル (*nökör*) として、クル・ボラト (*Kül-Bolat*) (オゴタイ家)、ノサル (*Nosal*) (バトゥ家)、ジュチ・ウルス)、キジル・ブカ (*Qizil-Buga*) (チャガタイ家)、エケ (*yeke*) (ソルコタニ・ベキ、即ち、トゥルイ家) の四人のエミール⁽²¹⁾ が、共同統治権を主張し、各家を代表して参加していた。しかし、これらのエミールは、イラン統治の実務には、携っていなかったらしく、というよりも、不得手であつたらしく

く、彼らは、各家から委任された統治権を實際に行使する bitikçi を、「アム行省」のディーワーン(Diwan)＝官衙に送りこんだ。ジュワイニーは、次のように言っている。

「エミールたちの各々は、ディーワーンに、諸王の利害を代表すべく、それぞれ一人のビチクチを送った。⁽²²⁾」

このように、モンゴル一族は、それぞれ、一人づつ、bitikçi を派遣していたのであるけれども、この他、「アム行省」存続の間に活躍した、「ジュワイニー史」から名前の知れる七人の bitikçi が、どのウルス、あるいは、「家」の利益を代表していたのかを考えてみると、シャラフ・アッ・ディーン (Sharaf-ad-Din) (在任期間一二三二～一二四六)、ニザーム・アッ・ディーン・シャー (Nizām-ad-Din Shah) (一二四六～一二四九)、ナジム・アッ・ディーン (Najm-ad-Din) (一二四九?) の三人は、バトゥ家に割当てられた一人枠の bitikçi 職を順次継ぎ、⁽²³⁾そして、在任期間は、はっきりしないが、オグルガイミシシ称制時代の一二四九年八月九月に第四代総督アルグン(Arghun)に同行して、モンゴリアに赴いたことのあるシ

ラージ・アッ・ディーン・シュジャーイ (Sirāj-ad-Din Shujā'i) は、ソルコタニ・ベキ、即ち、トゥルイ家の権益を代表していた。⁽²⁴⁾ ファクル・アッ・ディーン (Fakhr-ad-Din) は、ゲュクが一二四六年に即位した時、シャラフ・アッ・ディーンの死去にともない後任の ulug-bitikçi に、彼によって任命されたとジュワイニーが伝えるところによって、ゲュクに属していたのかもしれない。⁽²⁵⁾ 彼の子、フサム・アッ・ディーン・アミール・フサイン (Husām ad-Din Amir Husain) も同様である。第四代総督アルグンが、モンゴリアの大汗のオールドで、彼に遺恨、敵意を抱く者が、讒訴したのを弁明するため、一二五六年三月～四月に、モンゴリアへ出発した時、ジュワイニーと共に、「アム行省」を代理として続べたことのあるアフマッド・ビチクチ (Ahmad bitikçi) が、どの家の利益を代表していたのか不明である。⁽²⁶⁾

さて、今まで説明してきたところによって、私たちは、次のことに気付くはずである。一例として挙げたイラン統治機関＝「アム行省」は、モンゴル帝国、即ち、「国

「家」の出先の機関であるにもかかわらず、その本質は、ウルスのオルドⅡ「家政機関」Ⅱ「家」の構成員をもって、その連合、共同という形で組織されていたということ、これである。そして、この現象は、モンゴル帝国に於る最高の國務処理機関であるカラコルム中央政府でもみられることであって、結局、このことから、*bitikči* は、原則的には、家政機関Ⅱ*kešig*Ⅱ怯薛に属する人たちであったこと、しかしながら、こういう性格を持つ人たちであったにもかかわらず、実質的には、その「家」の構成員に適わしい職務を忠実に果たすというよりも、その範囲を逸脱して、「家」の利益を堅持しつつ、モンゴル帝国という、「国家」が処理していかなければならぬ諸事務を掌る人たちであった、ということができよう。それでは、*bitikči* が、どのような国家的事務に携っていたのか、次に、具体的に、これを詳述していくことにしたい。

Ⅱ *bitikči* の役割

bitikči が、いかなる職務を課せられ、何を忠実に果た

モンゴル帝国における必闡赤Ⅱ*bitikči*

ねばならなかったのか、ということについて、詳細に、しかも、まとめて伝える史料となると、私たちの手元には全然なく、あるのは、すべて断片的な記事ばかりである。なにかんづく、憲宗メング以前の *bitikči* の活動を書いたものは、一、二を除いて皆無といってよく、私たちが知り得るのは、僅に、その名前だけである。但、ルブルックとジュワイニーは、憲宗メング時代の *bitikči* につき、殊に、メング朝の *ulug bitikči* であったブルガイという人物の活動を伝えているので、これを手掛りに、*bitikči* の役割が何であったのか、その復原を試みたいと思う。その前に、私は、ルブルックがブルガイと呼ぶ人物が、他の史料の誰に比定でき、次に、果して、*bitikči* であったのか、どうか、その考証を済ませてから、役割に言及していくことにしたい。

(一) ルブルックのモンゴリア滞在と「一等書記ブルガイ」
一二五三年五月七日、コンスタンティノープルよりポントウスの海（黒海）に乗り出し、遙かモンゴリアを目ざし

て旅立ったルブルックは、聖ヨハネの祝日⁽²⁷⁾一二五三年十二月二七日に、メングの冬営地「汪吉」に到着したが、そこに滞在の間、しばしば、彼自身が、「書記の長」「一等書記」「ブルガイと呼ぶ人物と接触した。ルブルックは、メングのオルドに着くと、先ず、形式的に、謁見を済ませ、その後、ちっぽけな小屋をあてがわれて、そこで休息しているとブルガイの訪問を受けた。

「そのあと、書記の長が、私どもに会いに来ました。これは、ネストリウス派のキリスト教徒で、その勧告は、ほとんどすべてのことについて、聞き入れられるのです。彼は、私どもを、とっくりと調べ、例のハンガリー人を呼びにやって、それに色々尋ねました。」⁽²⁸⁾

さて、ルブルックの伝える「書記の長」「一等書記」のブルガイが、他の史料で、どのような形で現れてくるかについて Cleaves は、ブルガイが、グリゴール (Grigor)、キラコス (Kirakos) という二人のアルメニア史家の伝える Balaxay/Balaxé⁽²⁹⁾ であることを音韻の類似によって比定したけれども、一方 Boyle は、Blochet 編の「集史」

に Balagan という Balaxay/Balaxé に比定できる形を見出すと、彼は、Cleaves を批判して、この Balagan の発見は、Balaxay/Balaxé⁽³⁰⁾ ブルガイを成立させる可能性を少くすると云い、かえって、ルブルックのブルガイは、ジュワイニーの Bulghai に比定されるのであって、Balaxay/Balaxé とは、別人であるとした。⁽³⁰⁾ つまり、ルブルックのブルガイについて、Cleaves は、形は少し変るが、アルメニア史家の Balaxay/Balaxé に比定できるとしたのに対し、Boyle は、この説を成立し難いとして、彼自身はジュワイニーの Bulghai に比定できるとしたのである。ところで、私は、この二先学の比定に関する学説が音韻の類似に頼る言語学的操作に留まっていることに不満をもつ故、以下に、歴史的にルブルックのブルガイが、他の史料の誰に当るのか、闡明していきたいと思う。

Cleaves がブルガイに比定する Balaxay/Balaxé は、アルメニア史料 'History of the nation of the Archers' にフラグのイラン遠征軍の將軍として出てくる⁽³¹⁾ が、ジュワイニー史でこの Balaxay/Balaxé に比定でき

るのは、Balaghaiである。ジュワイニーは、フラグ軍の編成を述べて、

「バトウの代表者として、シバカン (Shibagan) の息子バラガイ (Balaghai)、トゥタル (Tutar)、オグル (Oghul)、それにクリ (Quli) をバトウの所属軍と共に派遣した」⁽³²⁾

と書いているが、今、Cleavesの説に従って、Balaxay/Balaxé=ブルガイであるとするなら、Balaxay/Balaxéは、確かに、ジュワイニーの Balaghai とイコールである故、三段論法の結論として、ブルガイ=Balaghaiであるということになるけれども、事実、そうであったのか。さて、フラグのイラン遠征軍は、ジュワイニーに拠れば、一二五三年十月十九日にモンゴリアを出発した。⁽³³⁾ この時、將軍 Balaghai も同行したのは当然のことであろう。然るに、ルブルックは、同年十二月二十七日にモンゴリアに到着し、問題のブルガイと会っているのである。即ち、ブルガイは、冬營地「汪吉」について、Balaghai はイラン遠征の途次にあつて、到底、Cleaves が Balaxay/Balaxé

モンゴル帝国における必闌赤=bitikci

「ブルガイ=Balaghai」という風に一人の人物に比定する説は認め難いのである。

Cleaves の説を右のように批判すると、次は、いよいよ、私の考えであるが、私は、音韻の類似だけに頼るのではなくて、ブルガイが「書記の長」「一等書記」と呼ばれていることに目をつけ、これに相当する職に、誰が就いていたのかを確かめ、それによって、比定を行いたいと思う。

ジュワイニーとラシードは、

「過去の臣従の功によって、幾多の権利を獲得していたブルガイ・アガ (Bulghai Aqa) は書記たちの長に、そして、彼らの vizier (=wazir) になることを命ぜられた」⁽³⁴⁾

と書き、元史卷一三四、也先不花伝は、

「昔刺斡忽勒早世、其子孛魯斡幼事睿宗、入宿衛。憲宗即位、与蒙哥撒兒密贊謀議、拜中書右丞相。」

と、また、元史卷三憲宗紀二年壬子条は、

「孛魯合掌、必闌赤。」

と書いてあるところを見ると、ルブルックの「書記の長」

「一等書記」は、vizier = wazir および、必闡赤を掌るところの「中書右丞相」に等しく、故に、ルブルックのブルガイは、地位からみて、また音韻的にも、ジュワイニーの Bulghai、そして、父の昔刺幹忽勒、息子の也先不花も bitikči 職に就いたことがあるというケレイト部族出身の⁽³⁵⁾「孛魯勸」＝「孛魯合」に比定できると思うのである。

ルブルックによって「一等書記」、ジュワイニーによって、vizier = wazir 元史によって、「中書右丞相」と呼ばれたブルガイ＝Bulghai＝「孛魯勸」＝「孛魯合」は、しかし、モンゴル帝国において、かくの如きイスラム的および、中国的官称号で呼ばれていた訳でなく、当然のことながら、正式には、彼らの政治的、文化的役割に対して、モンゴルの官称号 bitikči、もっと正確を期すれば、「bitikči 集団」のヒエラルキーにおいて、最高の地位を占める ulug-bitikči (一等書記) と呼び慣わされていたのである。この辺の事情を徐霆は、憲宗メングの時に先行するが、太宗オゴタイ朝の中書令＝ulug-bitikči であった耶律楚材、同じく、中書右丞相＝ulug-bitikči であった鎮

海を引合に出して、註している。

「移刺及鎮海自号為中書相公、総ニ国事。鎮海不レ止理ニ回回^二也。韃人無ニ相之称ニ、只称レ之、曰ニ必徹徹。必徹徹者、漢語令史也。使^ニ之主^ニ行文書^ニ耳^一」⁽³⁶⁾

同様に、vizier = wazir = ulug-bitikči であったことは、ジュワイニーによって「トランスオクサニアの征服以来、ずっと、チャガタイに仕えていて、ヴェジールの地位に列せられた」と誌されているハバシ・アシド (Habash Amid) が、ラシードによって、「ビチクチ ⁽³⁷⁾ [Бичикчи]」とも言い換えられていることから分るであろう。ulug-bitikči が、中書相公、vizier = wazir と自称、僭称されたことは、右から明らかとなったが、このことが、何故、なされなければならなかったのか。この理由を考えることは、bitikči の性格を見きわめる上で看過できないことである。周知のように、モンゴル帝国は、部族国家から、急速に遊牧帝国へと発展していったが、それにもかかわらず、国家のこの急激な膨張に応じて、未開から漸く脱け出したばかりのモンゴル人には、役割と地位に見合った

十分な官称号まで用意できなかった。それであるから、彼らは、その場を間に合せるために、*bitikči* なる官称号をウイグルから輸入したのであった。しかし、これとても、「如⁽³⁸⁾管⁽³⁸⁾文書」、則曰⁽³⁸⁾「必徹徹」とあるように、文書を掌る「文官」の総称であるに過ぎず、決して、既に引用した

「韃人無⁽³⁹⁾相之称」、只称⁽³⁹⁾之⁽³⁹⁾必徹徹。」

という記事から察知されるように、位階を示す官称号でなかったから、モンゴル人以外の人たちの目には、「韃主亦不⁽³⁹⁾曉⁽³⁹⁾官称之義」としか映らなかったであろう。それ

故、同時代の、若しくは、後世の中国、西アジア、ヨーロッパの歴史家、旅行家は、*bitikči* たちを、そのままモンゴルの官称号で呼ぶこともあれば、一方、もっと、その地位、役割を表現するのに適当な官称号はないものかと考えた結果、時に、自国の官称号である中書相公、*vizier* = *wazir* を当てて呼ぶようになったのではないかと想像されるのである。彼らが、こう呼んだことは、*bitikči* が、彼らに、イスラムのディーワーン *Diwān*、中国の中書省の「官

モンゴル帝国における必闡赤 = *bitikči*

僚」と映じたこと、そして、その結果、そのように、内容的には同じと概念化されたことに他ならぬが、確かに *bitikči* が、このようなイスラム的、中国的官称号で呼ばれたことは、次に述べる彼らの役割、職掌からみて、正鵠を得ていたと言いうことができるのである。

(二) ブルガイの *ulug-bitikči* としての職務

ルブルックよりも前に、すでに定宗グユクのオルドを訪れたカルピニは、

「タルタル人の皇帝は、外国人に向って、それがどんなに重要な人物であろうと、一人の仲立ちを介せずには直接、話しかけぬのがしきたりで、かれが聞いたり、返事したりするさいにも、必ず、その仲立ちを通じて行います⁽⁴⁰⁾」

と言って、外国人とモンゴル大汗との間に「仲立ち」のいたことを報告するが、ルブルックと憲宗メングとの間にも、「仲立ち」の役目を *ulug-bitikči* ブルガイが務めていたのである。

ブルガイは、ルブルックと何回か会見しているが、その時、ブルガイは、何をルブルックに話したのか。彼の旅行記を丹念に読めば、凡そ、次の三点であったことが理解せられる。これをブルガイ自身の言葉で誌すと、

(i) マング＝カンは、お前たちが、この地方へ来た理由を知りたがっている。

(ii) いままで、誰か、お前たちの使節が、ここへ来たことがあるか、または、誰か、こちらの使節が、お前たちのもとへ行ったことがあるか。

(iii) カン陛下は、お前たちが、ここへ来てからもう随分になる、と言っておられる。それで、カンは、お前たちが、自分の国へ帰るようのだまれ、そのさい、カンからの使節を伴って帰る意志があるかどうかを問うておられる、⁽⁴¹⁾ というのであった。これによると、ブルガイは、使節の任務、遣使往來の有無、答礼使を伴っていくかどうか、と

いうことを尋問したと言える。即ち、*ulug-bitikči* ブルガイは、グェク朝の *ulug-bitikči* であった鎮海、バラ (Bala) と同様、外国の使臣を接待、調査することにその

役割があつて、さらに附随的事務として、使臣の宿舍、食事、被服その他、滞在中に入用の物を世話、支給し、そして、鎮海とバラが、「タルタル語」でローマ教皇宛の書簡を草したように、⁽⁴²⁾ 遣使に対する返礼の書簡を認めなどしたのである。*ulug-bitikči* ブルガイは、まず第一に、モンゴル帝国の「外務大臣」であつたのである。ルブルックは、外国使節としてモンゴルを旅行し、モンゴル帝国からも、そのような身分の者として遇せられた結果、モンゴル帝国の「窓口」を務めたブルガイを、ただ「外務大臣」としか観察しなかったが、ジュワイニー、元史を繙くと、ブルガイが他にも種々の事務を掌っていたことが分る。

「侍從官のように、彼(ブルガイ)は、請願者の願いを報告しなければならず、且つ、それに留意しなければならなかった」

とあるブルガイの職務は、「外務大臣」と相俟つて、結局、元史卷三、憲宗紀に、

「以_ニ李魯合_ニ掌_ニ宣_ニ發_ニ、号令、朝覲、貢_ニ獻_ニ及_ニ内_ニ外_ニ聞_ニ奏_ニ諸_ニ事_ニ」
とある傍点を施した部分に該当するのであるまいか。つい

でに、ブルガイの「宣発、号令」のことを述べれば、これはジュワイニーに、

「勅令を書かねばならなかったのも、彼（ブルガイ）である」⁽⁴³⁾

とある勅令 *Yarligh* を作成し、それをモンゴル帝国全体に布告したことを意味するのであろう。ルブルックは、また、ブルガイが裁判官であったことも伝えている。ルブルックによれば、ブルガイは、ルブルック一行のうちの「朋輩バーソロミユ」が、モンゴルの禁忌を知らないで汗のオルドの敷居につまづいた時、裁く任務を行ったという。ルブルックは、審問の様子を伝えている。

「あくる日、裁判官のブルガイが来て、わたしどもが、敷居に触れぬよう注意を受けていたかどうかについて、こまかに問いただきました。わたしが、『閣下、われわれは通訳をつれておりませんでした。言われたことがどうして分りましたようか？』と答えますと、早速、朋輩を許してくれました」⁽⁴⁴⁾

さて、このルブルックの報道は、ブルガイがモンゴル官

僚制度における裁判官 *yarughuči* を兼ねていたことを意味するのであろうか。確かに、ブルガイは、ルブルックに「裁判官」と感じさせるような行為をしたけれども、しかし、注意しなければならぬのは、被告が誰で、どういう種類の人間であったのか、ということである。ブルガイの場合、被告は、外国人の「朋輩バーソロミユ」であって、このことは、彼の裁判所轄範囲が、外国人の裁判にあったことを意味するのであろう。彼の裁判官としての性格は、*yarughuči* ではなく、「外務大臣の資格で裁判に臨む」、喩えてみれば、「領事裁判」の型に近いものであったと思われる。外国人を除いた普通の裁判、司法は、別に *yarughuči* のメンゲセル (*Mengeser*) がいて所轄していたことから、このことは明らかである。元史卷三、憲宗紀は、メンゲセルにつき、

「以忙哥撒兒為斷事官」

と書き、ジュワイニーは、

「諸事件の調査と人々の諸要求に関する、すべてのことは、メンゲセル・ノヤンに委された。彼を補佐するに、

幾人かの経験豊かなエミールたちがいた。彼らは、正義の基礎をかためた⁽⁴⁵⁾と誌している。

かくて、ブルガイは、まさしく、専任の bitikči であつたのである。ブルガイは、また、ジュワイニーによれば、租税の徴収、授官を掌り、彼を補佐する者が、一人ないし二人いた⁽⁴⁶⁾と言う。要するに、ブルガイは、ルブルック、ジュワイニー、元史の記事を総合すると、(一)行政(勅令、授官)、(二)財政(租税の徴収)、(三)外交、(四)特別の裁判、司法(外国人の裁判)の四部門にタッチする、文字通り、オーラウンドのプレーヤー、職掌に専門的な分化を来たしてない万能の「官僚」と称せられて差支えなかったのである。

(三) bitikči と官衙組織

私は、今まで ulug-bitikči の一人であつたブルガイを通じて、bitikči の活動、役割が何であつたのか、推察してきた訳だが、次に、ジュワイニーがイスラムの官制デ

ィワーン(Diwan)に、元史、黒韃事略が「中書省」に擬し、ドーソンが「中央書記局」と呼び、その「記録局長」をブルガイとする官衙組織を鳥瞰⁽⁴⁷⁾し、この中にブルガイおよび、その他の bitikči の職務を還元して、bitikči の全体像に迫ることにしたい。ジュワイニーの呼称に従えば、ディワーンと言はれるカラコルムの中央政府の官衙組織は、幾つかの部署に分かれていて、職務が分担されており、その各々の部署には、既に引用したように、「ペルシャ語、ウィグル語、中国語、チベット語、タングート語などあらゆる種類の書記たちが、事務を執っていた」のである。そして、それぞれの部署の長官、次官には、幾人かの bitikči の名前がしばしば見え、このディワーンは、bitikči を主要な構成員として組織されていたことが察知せられるのである。

(I) ジュワイニーによって述べられる第一の部署は、租税の徴収と授官とを分掌していて、この長官は、同時にすべての部署をも統べる ulug-bitikči ブルガイであつた。⁽⁴⁸⁾この部署は、ジュワイニーによって言及されていないが、ヤ

サ (yasa) を書き、勅令、布令 (yarliḡh) を作成したことも、この責任であったと思われる。中枢の部署であるにもかかわらず、人員は、ブルガイと補佐の一人ないし二人でもって成っていた。租税の徴収について云えば、カラム中央政府と同様、各ウルスでも、また属領統治機関でも bitikči に、これを当らせていたと思われる。 Shi'usün ~ shüsün (食糧賦役) と呼ばれる屠殺用の小家畜を提供するとか、領主の営舎で乳をとるために一定期間、乳獣主として牝馬を差出すとかの遊牧民の貢納を完遂させるために、ウルスは bitikči は活躍したと思われるし、属領統治機関、例えば、アム行省では、コプチュル税をはじめとした諸税の徴収に bitikči が無視すべからざる役割を果したことは、ジュワイニー史によって確かめられるところである。イル汗国でも、bitikči は、Lambton によって 'revenu official' とまで訳されたように縦横に、⁽⁴⁸⁾ 税史としての役割を果したのである。

(II) ジュワイニーが分類する第二の部署は、商人、貿易業者に対する取次ぎ、金融、為替手形 (barāt) 発行の事務を

モンゴル帝国における必闡赤 = bitikči

行っていた。この部署を取仕切ったのは、二人のムスリムの bitikči で、一人は、かつて、オゴタイ、グユク朝で同じ事務を執っていたイマード・アル・ムルク ('Imād-al-mulk) で、もう一人は、メングの古くからの側近ファクル・アル・ムルク (Fakhr-al-mulk) であつた。⁽⁵⁰⁾ 元史卷三、憲宗紀によれば、「孛闌合剌孫掌^三斡脱」^二とあつて、孛闌合剌孫が長官ということになっている。さて、ジュワイニーは、オゴタイ朝のこの部署の bitikči につき、次のような面白い逸話を載せている。

あるオルターク商人 (ortāq, 斡脱) が、オゴタイのところにやって来て彼から五百バリシの資金を拝領して立去つた。暫くして、その商人は戻り、手元に一バリシも残していないことを上奏した。そして、到底認め難い口実を並べたてて、再び、前と同じ額の資金をオゴタイからせしめた。この商人が、同じことを二度繰返して、三度目に戻つて来た時、

「bitikči たちは、オルターク商人の伝言をカーンに聞奏することを躊躇した」。⁽⁵¹⁾

bitikči が大汗の手足となって連絡、取次ぎにあたるその対象は、何も特権的なオルターク商人に限られず、普通の商人も、bitikči を仲介とせずには、モンゴルの宮廷と直接に商業的行為を営むことはできなかった。商人が、必ず、この bitikči と接しなければならなかったところに、bitikči と商人との間に腐れ縁が生じることになった。ジュワイニーは、オゴタイの宮廷を訪れた商人と bitikči との関係につき挿話を載せている。

各地からカラコルムに來た商人は、品物の値段を自分で見積つてつけ、さらに、一割の割増をモンゴル大汗から特別に与えられることがあった。これに対し、官僚と大臣は、一割増を経費節減のため止すよう建言したが、その時、オゴタイは次のように言ったという。

「商人が、私たちの宮廷の財庫と取引するのは、幾分か利益を得、且つ、私たちの庇護でその利益を確保するためである。(それであるにもかかわらず) 事實は、汝ら、bitikči に(不当にも)支払わなければならぬカネがある。商人が損害に堪えかねて、私たちのところに姿

を現さなくなることがないよう、朕は、商人の汝らに対する借金を(一割の割増代金を払うことによって)肩代りしているのである」⁽⁵²⁾。

ジュワイニーは、商人に対して、bitikči が仲介の勞を取っていたことを述べつつ、その役割、職務を悪用して、商人たちより、あくどく、そして、不法にも、手数料を役得していたこと、ピンハネ、収賄の事實を云い、bitikči の官僚としての権力の濫用、醜き側面を暴かんと努めたのである。

(Ⅲ) 第三の部署は、タムガ (al-tangha) の捺印とパイザ (paiza) の発行を掌っていた⁽⁵³⁾。これは、オゴタイ朝のことを述べた彭大雅が、

「其印曰宣命之宝、字文疊篆而方径三寸有奇。鎮海掌之。……楚材、重山、鎮海、同握韃柄、凡四方之事、或未有韃主之命、而生殺予奪權已移於弄印者之手」⁽⁵⁴⁾ というところから、掌印が、鎮海、耶律楚材たち bitikči の重要な任務であって、この為にモンゴル大汗にまさるとも劣らぬ権力を握る可能性をもっていたことが理解され

る。

(IV) ジュワイニーは、第四の部署を兵器庫の監督に、その任があつたと規定するが、⁽⁵⁵⁾元史卷三、憲宗紀、元年辛亥条に、

「以晃兀兒留守和林官闕帑藏、阿藍荅兒副之」

とあるところによって、兵器庫ばかりでなく、宮廷の財庫をも管理していたらしい。この部署にも bitikči がいた。長官の晃兀兒に副した阿藍荅兒 Alam-dar もその一人であつて、彼は、もともと、トゥルイ家のアリグ・ブカに臣属し、定宗グクが、崩御した後、トゥルイ党のメング、シレムン (Shilemün) やバトゥがカヤリク (Qaya-ligh) に集つて、ケルレン河畔でのクリルタイ開催を決めた時、各ウルスに召集の使節として派遣された経験をもち、メング即位後、功によって、この職に任命されたと思われる。⁽⁵⁶⁾彼は、ずっと後のアリグ・ブカの乱に際し、タングートの地でエケ・カダン、タイジュ指揮のクビライ軍と戦つて敗死した bitikči でもあり、同時に將軍でもあつた。⁽⁵⁷⁾

モンゴル帝国における必闌赤=bitikči

阿藍荅兒 Alam-dar が bitikči として使節の任務を果たしたということ述べたついでに、この他、ジュワイニー史から、シレムン (Shilemün) トウルクメン (Türkmen) の二人の bitikči が使節として活躍しているのが見えることを付け加えておきたい。⁽⁵⁸⁾

ところで、十五世紀に書かれた Kitab Mu'izz al-Ansab の作者は bitikči が、金冊 (altan-depter) の管理に當っていたことを述べているけれども、この責務は、恐らくこの部署にあつたと思われる。曰く、

「ある一人のビチクチは、……部族に属していた。彼を含めたビチクチは、チンギス・ハンの金冊を守っていた。チンギス・ハン一族を除いて誰も、これを見ることが許されなかつた」⁽⁵⁹⁾

(V) 第五の部署は、卷狩のことを掌るが、ここに bitikči が所属していたかどうか不明である。⁽⁶⁰⁾

(VI) 第六の部署は、あらゆる宗教々団の聖者—イマーム (Imām)、サイイド (Sayyid)、デルヴィッシュ (der-vish)、キリスト教司祭—に関する諸事務を扱っていた。⁽⁶¹⁾

ブルガイが、肉をネストリウス派キリスト教徒に支給したのは、彼自身が、その信徒であったという理由によるばかりでなく、この部署の職務規定から出たものであろう。ルブルックは、次のように言っている。

「ネストリウス教徒の斎は、火曜日にはじまり、木曜日に終わりますから、かれらは、金曜日には、肉を食べません。その時、私は、ブルガイという名の一等書記が、金曜日にネストリウス教徒たちに肉を支給するのを見ましたが、かれらは、まるで過越節に羊が祝い別けられるように、その肉を非常に荘重に祝いました⁽⁶²⁾」

以上、私は、少し煩雑に過ぎたが、カラコルム中央政府の官衙組織とそれを構成する幾つかの部署、そして、そこに於て、与えられた役割を忠実に果たす bitikči の活動を概観してきたわけであるが、要するに、役目という点に視角を据えてみると、bitikči は、その言葉通りの逐語訳「書記」というイメージから連想される以上のものであって、Barthold が、'official' と訳すように、まさしく「官僚」と呼ばなければならぬ存在であったことを指摘し

ておかねばならない。しかしながら、bitikči は、かく規定されようとも、近代的な意味での官僚とは、自ら性格を異にするし、また、モンゴル帝国で官僚と呼ばれても差支えないような人々は、bitikči に限らず他にもいて、bitikči は、その中でも、特別の資格を備えた官僚群の一つであったから、いくらかのことをわけて、私たちは、bitikči を「官僚」と呼び、規定していかなければならない。それ故、私は、次に、アム行省に於て官僚の二つの系譜を成す bitikči と kätib とを比較して、bitikči がいかなる資格をもつ官僚であったかを明らかにし、ついで bitikči の官僚としての地位を述べ、bitikči がカッコ付きの官僚であったことを明らかにするよう努めたい。

III、アム行省の bitikči と kätib

アッバース朝、セルジューク朝、ホラズム・シャー朝などのイスラム諸王朝の中にあつて、Kätib と呼び慣わされて来た「官僚」は、モンゴルがイランの地に侵入し、征服、統治を始めても、協力を誓いさえすれば旧職を安堵さ

れ、再び、モンゴルの統治機関＝アム行省で、官僚として踏み出すことが出来た。ジュワイニーの父バハー・アッ・ディーン (Bahā-ad-Din) は、この系譜をひく典型的な人物であった。彼は、モンゴルがホラーサーン地方を劫掠すると、ニシャプールの市民と一緒にトゥースに逃げ、そのタージ・アッ・ディーン・ファリザニー (Tāj ad-Din Farizani) に保護を求めて行ったが、それも儘ならず、モンゴルの手中に落ち、支配統治に協力することを強制され、ジュワイニー家代々のサーヒブ・ディーワーン職を安堵され、アム行省の官僚として再出発したのである。⁽⁶⁴⁾

かくして、バハー・アッ・ディーンを代表とするイスラム的官僚 *katib* は、アム行省の官衙で行政の実務に参加していくことになったが、彼らは、この過程で同じような性格、同じような職務をもつ、すぐれてモンゴルの官僚 *bitikçi* を見出すことになった。しかし、一見、同じに見える *bitikçi* と *katib* は、その実、大きな違いがあった。Gerhard Dörfer は、逸早く、このことに気づき、その相違点を発見しようと努めたけれども、彼は、モンゴ

ル時代のペルシャ語文献は、*bitikçi* と *katib* を用語上区別しているに過ぎないのであって、その職掌は同じである、と指摘するに終わった。⁽⁶⁵⁾ 確かにジュワイニー史にあたって *bitikçi* と *katib* の活動を調べてみると、全く同じような職務を行なっているのである。例えば、徴税などがそうである。

(i) シャラフ・アッ・ディーン (*bitikçi*) は、ホラーサーンとマーザンダラーンの滞納した税を四百金バリシで請負った。彼は、ホラーサーンに到着すると財政権を一手に収めた。⁽⁶⁶⁾

(ii) (第三代総督) コルグズの死の報を聞くとシャラフ・アッ・ディーンは、野心のおもむくままに振まうようになり、苛酷な税の取立を行った。⁽⁶⁷⁾

(iii) グュクの即位式に参列するため、アルグン (Arghun) 一行は、モンゴリアにマリク (*malik*)、歳入使と連れ立って出発した。バハー・アッ・ディーン (*katib*) をアゼルバイジャン、ジョルジア (グルジャ)、ルーム等々の地域の徴税代理にあたらせた。⁽⁶⁸⁾

(iv) 今や、イラクの指導者たち、サドル (Sadr) たちが到着した。それで、コルグズは、彼の息子をディーワーンの *katib* たちと一緒に、イラク、アッラーン、アゼルバイ ジャーンに派遣した。名義上は、*katib* たちは多くいたけれども仕事の中心となったのは、ニザーム・アッ・ディーン・シャー (*Nizām-ad-Din shāh*) であった。⁽⁶⁹⁾

このように、*bitikči* と *katib* を職掌という点に限って比較してみるならば、誰の目にも同じであると映るのは当然であるだろう。だがしかし、観点を變えてこれら官僚とモンゴル王族との関係、彼らの駆使した言語ということに注意を向けるならば、両者は、やはり、異っていたと思われる。

bitikči は、既に述べたように、ウルスの「汗」たちのオールドに属する「家の官吏」を原則とし、アム行省には、彼らの主人、モンゴル王族の權益を代表して派遣されていた。そして、*bitikči* を含むケシクテイ (*kešigtei* = 怯薛歹) を有することのできるモンゴル王族の数は限られていたから、アム行省の *bitikči* もまた定員があったわ

けである。定員が何人であったかは、よく分らぬが、ジュワイニー史に拠るかぎり、少くとも、四人であったとしておいて大過はないと思う。四人の *bitikči* をアム行省に出向させたのは、ジュチ、チャガタイ、オゴタイ、トゥルイの四家であったのである。但、この四家だけが、*bitikči* 派遣の権利をもっていたかどうかとなると疑わしい。ジュワイニーは、メングの即位式に遅れて、モンゴリアに到着したアム行省の第四代総督アルグンが、その職を安堵されたという記事に続けて、次のように言っているからである。

「大ハンは、何よりも先に、彼 (*Arghun*) にヤルリクと虎頭符を授け、ナイマタイ (*Naimatai*) とトゥルマタイ (*Turumatai*) を彼の *nökör* (僚友) に任命した。同様に、諸弟、即ち、クビライ、フラグ、アリグ・ブカ、メゲ (*möge*) の各々を代表するエミールが、各一人づつ *nökör* (僚友) として任命された。⁽⁷⁰⁾」

これによると、*nökör* = 僚友 = エミールを出せる資格は、四家の他に、モンゴル大汗、および、その諸弟にもあった

から、メングの時には、その *noḡor*・僚友・エミールたちが、出す *bitikči* は、合計九人いたことになり、結局、アム行省の *bitikči* の定員は、最低限四人であって、それぞれがモンゴルの立場に立っていたとしておきたい。

これに反して、*katib* はどうであったかという点、彼らは、「汗」たちのオルドに行つてそこで主従の關係を結んだわけではなく、イランの現地でアム行省によつて採用された官僚であつた。それであるから、*katib* は、數に制限もなければ、モンゴルの為に働くという点では、*bitikči* に比べモンゴルの色彩が弱かつたと言えるであらう。*katib* には、モンゴル王族の「家の官吏」という性格は、非常に稀薄であつたのである。とはいえ、*katib* の中には、その實力を認められて *bitikči* に鞍替する者も出てくるが、それは、*bitikči* のポストが空いた時にはじめて可能であつた。有力な *katib* であるニザーム・アッ・デーン・シャー (*Nizām-ad-Dīn shāh*) が、イラン人の利益を代弁する「ホラーサーン官僚」から、ジュチ家の *bitikči* 即ち、モンゴルの官僚へと転身するのは、前任者

のシャラフ・アッ・ディーンが死んだ一二四六年のことであつた。⁽⁷¹⁾

bitikči が、モンゴル王族との關係に於て、より密接であつたことは、そのまま、彼らの驅使する言語にも反映した。つまり、モンゴルとの頻繁な關係が、彼らの出身民族の言語に加えて、モンゴル語とそれの正書法に堪能なことを要求したのである。ジュワイニーは、

「フサーム・アッ・ディーン・アミール・フサインは、ホージャ・ファクル・アッ・ディーン・ビヒシテイの他の息子たちよりも若かつたとはいえ、彼は、モンゴル語を、ウィグル・スクリプトで書写することができたため、また、当代でも際立つた教養の持主であつたため、*ulug bitikči* に任ぜられた。」

と言つて、このことを裏づけている。⁽⁷²⁾

これに反して *katib* はどうかといえば、モンゴル語は、出来ないよりも出来た方がよいに決っているが、そのモンゴル語も、ウィグル文字正書法 (*Uighur script*) で書く文語に練達している必要はなく、会話に事欠かない口語

で十分足りたと思う。katib は、イランの現地で住民と接触するのに必要な言語を駆使できればよかったのではないだろうか。bitikči にとって、その職に就くのに Uighur script に通曉していることは、資格要件の一つであったが、katib は、そうでなかったというのが、両者の違いでなかったかと思われるのである。このことは、モンゴルの官僚 bitikči とイスラム・イランの官僚 katib との違いでもあったのである。bitikči は、katib よりも、つまるところ、二重言語所有者としての性格が一層、際立っていたのである。

四、bitikči の地位

ulug-bitikči ブルガイとジュワイニーの述べる官衙組織 Diwān での bitikči の活動とから、bitikči が、モンゴル帝国の国務処理機関の中枢を占める「官僚」であったことは、私たちの既に見てきたところであったが、この官僚としての性格、役割こそは、それに見合う十分なる地位を彼らに保証したのであった。

さて、モンゴル帝国の大汗、若しくは、各ウルスの諸皇子、諸王のオールドには、多数の漢人、色目人が工匠、農耕民、召使、奴隸、捕虜、通訳として中国、西アジア、トルキスタン、遠くヨーロッパから拉致されて来ていたが、就中、カラコルムは、これら「隷属民の工場」という属性をになって、賑いをみせていた。⁽⁷³⁾ bitikči は、文字を使って言語を正書するという文化的能力を認められて、モンゴル帝国の「汗」たちと主従関係を結ぶ漢人、色目人の一群でもあった。彼らの持つ文化的能力は、しかし、工匠、農耕民、召使、奴隸、捕虜の果す役割と比べ、モンゴル帝国に対する貢献度という点で、格段の差があったため、bitikči は、その大半が本来なら被支配階級の地位に甘んじなければならぬ非モンゴル系民族であったにもかかわらず、彼らは、その統治技術を尊重されて、支配階級モンゴルに準ずる待遇を得たのであった。モンゴル時代を封建制の時代と規定し、工匠、捕虜などの存在を奴隸制の残滓とみる M. П. Перяменский 教授の説に従えば、⁽⁷⁴⁾ 工匠、農民、捕虜、通訳などの漢人、色目人の一群は、まさしく、「奴隸」的

地位にあったのに対し、bitikčiは、「汗」たちと主従の關係を結ぶ kešigtei—怯薛歹—ケシクテイ、家臣 (nökör) の地位にあり、したがって、その待遇も家臣に適はしく、カラコルムの一画、大汗の城の左右の場所に、「大邸宅」を持つほどであったのである。ルブルックは次のように伝えている。

「カラコルムの都市については、つぎのように申し上げられます。(中略)、そこには、二つの市区があります。一つは、イスラム教徒の地区で、そこには、多くの市が開かれていて、沢山の商人が、ここへ集ります。それは、いつでも、その近くにある宮廷のためと、また、多数の使節たちのためとです。ほかの一市区は、みな職人であるカタイ人のそれです。この二市区のほかに、宮廷の書記たちの大邸宅があります。」⁽⁷⁵⁾

さて、ルブルックは、bitikčiだけが、「大邸宅」を持っていたかの如くに書いているが、これも旅行者の一面的な觀察に過ぎず、ジュワイニーによって補えば、大汗の城の左右に邸宅をもっていたのは、bitikčiをも含めた怯

薛、侍衛 (Turqaq) の官人、大汗の諸兄弟、諸皇子であった。bitikčiは、つまり、これらの人たちと同様、「大邸宅」を賜与されるほど、好遇されていたのである。しかるに、同じ漢人、色目人であっても、例えば、カタイの手工業者は、ルブルックの記述によれば「モンゴル人に取りたてられる絹織物、食糧品、その他、モンゴル人にたいして行ふ奉仕」以外に、毎日、千五百ヤスコットの貢物を納めなければならぬ冷遇というよりも、むしろ、極めて、隷属的な立場におかれていた。⁽⁷⁶⁾ ルブルックの伝えるヨーロッパ人の召使、捕虜、そして通訳さえもが、皆、大汗の「奴隸」としか考えられなかったのである。彼らは、一生を国家権力と無関係の存在で過し、日々、モンゴル帝国の支配階級から、それぞれの文化的能力を果すことを強いられつつ生涯を終え、国家権力を代弁した官僚 bitikči とは、雲泥の差があったのである。確かに、bitikči は、他の漢人、色目人と比較すると、疑いもなく、支配者の側に立ち、時には、

「韃主不識⁽⁷⁷⁾字」

ということを良いことにして、その私意を恣いままにし、支配階級たるモンゴル人をさえ出し抜くことがあったのである。だがしかし、このように、家臣として、官僚として、支配階級たるモンゴルにも肩をならべ、伍していくかに見えた *bitikči* も、「汗」たちのケシクテイという資格、身分が災いして、地位および権力は、意外に安定せず、とりわけ、称制時代は、このことが著しかった。

モンゴル帝国第二代の大汗オゴタイが逝去し、クリルタイでグェクが第三代の大汗に推挙されるまでの間、慣習によってオゴタイの皇妃テレゲネ (*Töregene*) が摂政した称制の時代は、*bitikči* にとって恩寵を与える主人の一时的喪失を意味していた。テレゲネがオゴタイのオルドを管理し、「一切の国家事務の命令は、テレゲネが出し」、*ulug-bitikči* の「チンカイ (鎮海) 以下、カーンの旧臣は、以前のように、自分の義務を実行し続け、至る所の代官は、そのポストに留った」としても、彼女がオゴタイと同程度の庇護をオゴタイの旧臣、*bitikči* に授けるとは限らなかったからである。事実、テレゲネは、称制するとすぐに、

氣に入りの側近ファアティマ (*Fatima*) と共謀して、鎮海あるいは、サーヒブ・ディーワーン職のヤラワチ (*Yaravach*) を捕えようとし、このため、彼らは、テレゲネの子ケテン (*Köten*) のところに身を寄せ、保護を求めたのであった。⁽⁷⁹⁾

要するに、鎮海をはじめとする *bitikči* は、オゴタイと個人的な主従関係を結び、彼の家政機関 *kesig* 怯薛に属するケシクテイであったので、オゴタイの死は、即ち、*bitikči* の権力の淵源を失うに等しかったのである。*bitikči* は、「汗」たち、つまり、主人あつての *bitikči* であり得たのであり、この意味で、「官僚」とは言いつても、「汗」たちにのみ隷従し、その恩寵だけを唯一の頼りとする「家産官吏」と呼ぶ方が、*bitikči* の性格をよりよく表現していると言えるだろう。

おわりに

bitikči は、モンゴル帝国が部族国家から遊牧帝国、征服王朝へと発展しつつある過程で登場し、主として、支配

統治に関する実務を行い、モンゴル大汗、ウルスの「汗」たちのオルドに所属して、彼らの「官僚」「家産官吏」を形成していった。しかし、bitikči は、「官僚」とは言っても、「汗」たちとの絆が堅い「宮廷・オルドの官」という性格を色濃く残し、「汗」たちの独裁権力にブレーキをかけるような完全な官僚機構を組織することを認められなかった。モンゴル帝国の大汗およびウルスの「汗」たちは、bitikči をかく従属的な地位にある者と規定し、同時に「恩寵」を与えて好遇して、自分たちと bitikči の関係を緊密にすることによって、支配統治事務、国務処理を実際に行使する bitikči と、その全機構を完全に掌握することを狙い、こうして、モンゴル帝国の大汗とウルスの「汗」たちは、比類稀な絶対的独裁権力をモンゴル帝国の本地、ウルス、属領に確立していったのである。オルドと官僚機構を分離しないで、いずれも、「汗」たちの統制下においたことは、モンゴル帝国の国家構造が家産国家的であったことを示し、また、このような構造は、君主独裁権力を恣いままにする典型的な東洋デスポティズムの実現を

可能にしたとも言えるのである。「汗」たちの手となり、足となる「官僚」「家産官吏」であった bitikči は、「汗」たちに忠誠を誓うことを厳しく求められたが、他の点では、比較的、自由を享受できた。bitikči の信仰・教養・文化は、シャマニズム、イスラム、ネストリウス教、仏教、儒教の何であろうと問われることはなく、出自についてもケレイト部族の有力者、遼金の世族、故族、西夏の国族といった名家の出の者から、金朝の進士、オアシス農耕民、「荷担ぎ人夫の子」に至るまで様々であったところは、全く、寛容であった。モンゴル帝国にとって是非とも必要なもの、それは何よりも文字、および、その正書法の知識であり、それを駆使できさえすれば、他の一切は、すべて問題外としたのである。モンゴル帝国の発展とともに成立した「bitikči 制」は、しかし、征服統治が進むにつれて、次第に、征服地固有の伝統的な官僚制度との拮抗、対立を生み、終には、「bitikči 制」の変質を迫られることになった。この変質の過程は、中国の科举制度、イスラムのデイーワーン制度との関連で、それぞれ独自に考察されるべ

き問題である。本稿は、bitikči が最もモンゴルの得たモンゴル帝国初期の時代の研究をもって、筆を擱くことにする。

註

- (1) Houtsma, The Encyclopedia of Islam, vol. I, Leyd. & Lond., 1913, BITIKČI の項 (Barthold 執筆), p. 734-735
- (2) 白鳥庫吉「高麗史に見えたる蒙古語の解釈」東洋学報 18-2, pp. 172-3
- H. A. R. Gibb etc., Encyclopedia of Islam, New edition, vol. I, Leid., 1960, BITIKČI の項 (D. Sinor 執筆), pp. 1248-1249.
- (3) Houtsma, op. cit., pp. 734-735
- Barthold, Turkestan down to the Mongol Invasion (GMS, New Series, V), Lond., 1928, p. 312.
- (4) В. М. Надеждин, Древнетюркский словарь, Ленинград, 1969, стр. 103.
- (5) Houtsma, op. cit., pp. 734-5
- (6) 白鳥庫吉「前掲論文」pp. 172-173.
- (7) ibid.
- В. В. Радлов, Опыт словаря тюркских наречий, Санкт-Петербург, 1893, том IV, часть 2, стр. 1775. H. A. R. Gibb, op. cit., pp. 1248-1249.

私は、本稿でビチクチを bicigeci というモンゴル語形を使わず、Juvaini/Boyle に準拠してテュルク語形 bitikči で表記する。

(8) 真杉慶夫「元朝の必闡赤について」(『元史刑法志の研究』所収、教育書籍、昭和36年)

宮崎市定「元朝治下の蒙古的官職をめぐる蒙漢関係」、『東洋史研究』23-4。

(9) 王国維、蒙鞬備錄箋証一卷(『蒙古史料四種』所収、正中書局)、p. 480

(10) 昔刺幹忽勒については、元史卷一三四、也先不花伝を参照。アビシカについては、

Рашид-ад-Дин, Сьорник летописей, книга I, перевод с персидского А. А. Хетагурова, 1952, стр. 134-5 を参照。

なお、「モンゴル語」の bitikči が登場した時期を、真杉慶夫氏は、ウィグル文字が塔々統阿によってモンゴル帝国に輸入された一二〇四年以後——従って、ナイマン部征討前に創設された怯薛の中に、bitikči 職は入っていない——とされたが、私は、ナイマン部攻撃前に創設された怯薛の官に、bitikči 職も含まれていたという仮説を立てている。というのは、(1)最初の二人の bitikči が、ともにケレイト部出身で、彼らがチンギス汗に服属したのは、遅くとも、一二〇三年迄であること、そして、(2) bitikči は怯薛の官の一つであるから、制度史的にキツチリと考えるのであれば、怯薛が設置されたナイマン部征討

前、一二〇四年に設けられたと演繹できるからである。但、(2) については、一二〇六年のチンギス汗第二次即位の際に、怯薛が拡充されているので、その時に、あるいは、塔々統阿による文字伝播以後より、その頃迄に設置されたと考える方が、自然でないかという反論も出されるであらう。しかし、私は、成吉思汗実録に、失喇忽勒(『昔刺斡忽勒』)が、第二次のチンギス汗即位の時、千戸長に任命されていることに注意したい。チンギス汗朝にあって、千戸長は、同時に、怯薛の職を兼任することとは原則として許されなかったので、昔刺斡忽勒の *bitikči* 職在任は、一二〇六年よりも前と考えざるを得ない。また、史料から名前の分る七人の「モンゴル語」の *bitikči* (昔刺斡忽勒、孛羅合、也先不花、アビシカ、トゥクル、薛徹兀児、アルグン)のうち、最初の五人はケレイト部出身であり、しかも、彼らの間には、*bitikči* 職世襲の事実が見え、(4)昔刺斡忽勒→孛羅合→也先不花、(5)アビシカ→トゥクル、さらに、最初の *bitikči* がよりによってケレイト部人であることを考慮に入れると、*bitikči* とモンゴル文語とケレイト部族との三者の間には、何かしら繋がりがありそうであり、塔々統阿のことにこだわらなくとも、一二〇四年に、既に、*bitikči* 職が設置されていたと推察することも可能のように思える。

(11) 元史卷一三三、暗伯伝

僧吉陀は、「不命替児哈納之地」で帰服後、禿魯哈必闌赤に任命された。真杉慶夫氏は、禿魯哈を人名と解釈しているが (op.

モンゴル帝国における必闌赤—*bitikči*

cit., p. 91) 誤りであって、これは、村上正二氏が指摘されるように侍衛の謂であった。

- (12) 元史卷一四六、粘合重山伝
- (13) 元史卷四九、移刺捏児伝
- (14) 元史卷一三五、鉄哥朮伝
- (15) 元史卷一二〇、曷思麦里伝
- (16) Рашид-ад-Дин, Сборник летописей, том II, перевод с персидского Ю. И. Верховского, Москва и Ленинград, 1960, стр. 144.
- (17) 箭内互「元朝怯薛考」(『蒙古史研究』所収、刀江書院、昭和41年) p. 242
- (18) 村上正二「チンギス汗帝国成立の過程」歴史学研究一五四号、p. 25
- (19) Juvaini, The history of the world conqueror, translated by J. A. Boyle, Manchester University Press, vol I, 1958, pp. 489-491
- (20) Juvaini/Boyle, op. cit., vol II, pp. 482-3.
- (21) 本田実信「阿母河等処行尚書省考」『北方文化研究』2、p. 92
- (22) Juvaini/Boyle, op. cit., pp. 482-3
- (23) Juvaini/Boyle, op. cit., p. 487, Рашид/Верховский, стр. 34.
- (24) Juvaini/Boyle, op. cit., p. 487, pp. 533-4 (Sharāf-ad-Dīn の任命), p. 509, p. 543 (Sharāf-ad-Dīn の死), p.

- 513 (Nizām-ad-Dīn al-Bitīkī 就任) p. 514 (Najm-ad-Dīn al-Bitīkī 就任)
- (24) Juvainī/Boyle, op. cit., p. 513.
- (25) Juvainī/Boyle, op. cit., p. 509.
- (26) Juvainī/Boyle, op. cit., p. 522.
- (27) 護雅夫、カルピニールブルック中央アジア蒙古旅行記、桃源社、p. 132, p. 212
- 元史卷三憲宗紀三年癸丑条に、「冬十二月、(中略)帝駐蹕汪吉之地」とあるにもつてルブルックの到着した一二五三年十二月、メングのオルドは「汪吉」にあった。
- (28) ルブルック(護雅夫訳)、op. cit., pp. 214-5.
- (29) F. W. Cleaves, The Mongolian names and terms in the History of the Nation of the Archers by Grigor Akanc', Harvard Univ., 1954, p. 414.
- (30) Juvainī/Boyle, op. cit., p. 572 註 69, p. 608 註 1.
- (31) Cleaves, op. cit., pp. 413-4.
- (32) Juvainī/Boyle, op. cit., pp. 607-8.
- (33) Juvainī/Boyle, op. cit., p. 611.
- (34) Juvainī/Boyle, op. cit., p. 605 Рашид/Верховский, стр. 133.
- (35) 元史卷一三四、也先不花伝。
- (36) 王国維、黑鞬事略箋証一卷(「蒙古史料四種」、正中書局)、p. 467.
- 前田直典「元朝行省の成立過程」、史学雑誌6—9、p. 20.
- (37) Juvainī/Boyle, op. cit., p. 272, Рашид/Верховский, стр. 102.
- (38) 黑鞬事略、p. 480.
- (39) ibid., p. 495.
- (40) カルピニ(護雅夫訳) op. cit., p. 84.
- (41) ルブルック、op. cit., pp. 268-9.
- (42) カルピニ、op. cit., p. 83.
- (43) Juvainī/Boyle, op. cit., p. 605.
- (44) ルブルック、op. cit., p. 237.
- (45) Juvainī/Boyle op. cit., p. 605, Рашид/Верховский, стр. 133.
- (46) ibid.
- (47) シーモン、蒙古史、下巻、田中萃一郎訳補、岩波書店、p. 165.
- (48) Juvainī/Boyle, op. cit., p. 605.
- (49) A. K. S. Lambton, Landlord and peasant in Persia, Oxford Univ., 1953, p. 84.
- (50) Juvainī/Boyle, op. cit., p. 605.
- (51) ibid., pp. 209-210, Рашид/Верховский, стр. 52.
- (52) ibid., p. 213, Там же, стр. 54.
- (53) ibid., p. 605.
- (54) 黑鞬事略、op. cit., p. 484.

- (13) Juvaini/Boyle, op. cit., p. 606.
- (14) *ibid.*, p. 566, Рашид/Берховский, стр. 131.
- (15) Там же, стр. 17, 161, 166-167.
- (16) Juvaini/Boyle, op. cit., p. 586.
- (17) Barthold, op. cit., pp. 44-5.
- (18)(19) Juvaini/Boyle, op. cit., p. 606.
- (20) *ibid.*, p. 233.
- (21) Barthold, op. cit., p. 70.
- (22) Juvaini/Boyle, Translator's Introduction, xv-xvii.
- (23) Gerhard Doerfer, Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen, Band II, Wiesbaden, 1963, p. 266.
- (24) Juvaini/Boyle, op. cit., p. 538.
- (25) *ibid.*, pp. 539-40.
- (26) *ibid.*, p. 508.
- (27) *ibid.*, p. 501. Boyle の註に 'Nizām-ad-Din 以下の kātib や secretary の誤り' mirzā muḥammad の *ghulām* は語校に本が 'kātib' であること。 Tarikh-i-Jahān-Gushā, part II, edited by mirzā muḥammad, Leyd. & Lond., 1916, p. 244. を参照。
- (28) Juvaini/Boyle, op. cit., p. 518.
- (29) 「ホラサン官僚」については本田実信氏の前掲論文を参照。
- (30) *ibid.*, p. 513.

- (31) *ibid.*, p. 523.
 - (32) 岩佐精一郎「元代の和林」(『岩佐精一郎遺稿』所収) p. 249
 - (33) И. П. Петрушевский, Земледелие и аграрные отношения в Иране XIII-XIV веков, Москва • Ленинград, 1960, стр. 30.
 - (34) ルブルック, op. cit., p. 259.
 - (35) *ibid.*, p. 207.
 - (36) 黒韃事略, op. cit., pp. 484-9.
 - (37) Juvaini/Boyle, op. cit., p. 240, Рашид/Берховский, стр. 115.
 - (38) *ibid.*, Там же.
- 〈付記〉本稿は、昭和44年1月に提出した学部卒業論文の主要なところを新に書き改めたものである。論文の指導をして下さった前嶋信次先生、発表に際して御迷惑をおかけした伊藤清司先生、文献の貸与と貴重な助言をいただいた家嶋彦一、岩見隆の両氏に御礼申し上げます。

附表 漠北時代の bitikči (空白は不明を示す)

	民族出身地	所 属	前 歴	世 襲	宗教・文化
昔刺斡忽勒	Kereit	Chingiz-Khan	Kereit の有力者	孛魯歡=Bulghai	ネストリウス教 (?)
Abishka	"	"	兄が千戸長	Tukur (甥)	
僧 吉 陀	Tangut	"		禿児赤 (子)	
粘 合 重 山	女 真	Chingiz+Ögetei (?)	金の世族		
移 刺 捏 児	契 丹	Chingiz-Khan		哈刺哈孫 (孫)	
耶 律 阿 海	"	"	遼の故族	驢馬 (孫)	
野 里 朮	高 昌	"	父の達斡は高昌で尚書 を号す		
曷 思 麦 里	谷則斡児朶	"	Balasagun 可撒ハ 思哈の長官	密里吉 (子)	
薛 潮 兀 児	Mongol	"			
耶 律 楚 材	契 丹	Chingiz+Ögetei (?)	遼東丹王突欲八世の 孫、金朝の進士	耶律鑄 (子)	儒教 (文化)
鎮 海	Uighur	Chingiz+Ögetei + Güyük			ネストリウス教
李 禎	Tangut	Ögetei	西夏国族の子、金末の 経童中選		
Arghun	Oirat	"	父が千戸長 (ラシード による)		
Bala	Uighur	Güyük			仏教
Shilemün		Sorqoqtani-Beki			

Türkmen		Sorqoqtani-Beki			
Alamdār=阿藍荅兒		"			
Bulghai=孛魯歡	Kereit	"	父が ulug-bitikči	也先不花(子)	ネストリウス教
Körgüz	Uighur	Juchi	オアシス農耕民		
張 善	漢 人	Tului	金の進士		儒教
Habash 'Amīd	Otrar	Chaghatai		Suleiman-bek	イスラム
Miran		Yesü-Mengü			
撒 吉 思	Uighur	Otegin	国阿大都督多和思の次子		
劉 德 寧	女 真	"			
Sharāf-ad-Dīn	Khorazm	Batu	荷担ぎ人夫の子、 khorazm の malik の 小姓		
Nizām-ad-Dīn Shah		"	kātib		
Najm-ad-Dīn 'Ali of Jilābād	Khorazm	"			
Sirāj-ad-Dīn Shujā'ī		Sorqoqtani-Beki			
Fakhr-ad-Dīn	Khorazm	Güyük (?)		Husām-ad-Dīn	
Husām-ad-Dīn	"	"			
Ahmad					